

文字の帯びる身体性と社会性

——文字嚙下の伝承と儀礼をめぐって——

鵜飼 大介

本論では文字の社会学的な考察として、文字と身体、社会をめぐる関係の様態を問題にする。具体的には、文字嚙下行為を考察対象とする。文字を「食べられるもの」として同定し、了解する場合、身体も文字を食べる身体として同定を被り、了解される。それに相即して文字嚙下の儀礼や伝承を組み込んだ社会自体も、同定を被り、了解されるのである。文字嚙下の儀礼、「文字喪失の伝承」、ユダヤ教に内在する文字観について順次考察していく。

分析を進めるにあたり、文字嚙下行為を構成する三つの契機——文字の物質的な具現、文字の身体への内化、文字の物質としての消失——を取り出し、それぞれの契機の中の絡み合う関係に着目する。例えば、文字嚙下行為に内在する肯定的な契機と否定的な契機の二重性や、手の働きを通じた書記行為と口を通じた嚙下行為という、外化と内化の対照的な方向性について論究する。

1. 社会学的対象としての文字

文字について論じるには、種々の方法や視点が考えられるし、実際にさまざまな学問領域からのアプローチがこれまで存在した。例えば教育学的な見地（読み書き能力の習得過程）からの解明、日本における漢字や仮名といった表記法の歴史的展開を辿る研究、古代中国における文字の成立過程やその文化的背景に迫る研究、文化人類学的な「識字」(literacy) 研究、オングのように「文字の文化」の心性を「声の文化」との差異や対比によって捉える立場、言語学的な視点からの文字了解など、種々の学問領域から文字へのアプローチが試みられてきた。そのなかで本論は、文字の社会学的な考察の方法を探

るものである。

文字に対する種々のアプローチの仕方を整理し、本論の立場を明確にしていきたい。シャルチエは「書物の秩序」の分析の際に「書物／テキスト／読解」という区分を用いている(Chartier [1992=1996])。それに関連して「文字の形態論／文字の意味論／文字の身体論(実践論)」という区分を仮構してみよう。「文字の形態論／文字の意味論／文字の身体論(実践論)」という学問領域が実在するわけではないが、この区分を用いて本論のねらいを明確にすることができる。「文字の形態論」が文字の物質的形態、つまり各種の文字の書体や字体、筆跡などを扱うとすれば、「文字の意味論」は「音声言語／文字言語」や「文字でない図像表現／文字」のような分節化の様態を、歴史的・社会的な協

働連関との関係において問うのである。「文字の形態論」では図像学や各種の文字存立の文化的背景を捉える知見、「文字の意味論」では言語学や記号論などが必要になるだろう。「文字の身体論(実践論)」は、文字と身体の結ぶ関係の様態を扱うが、これは文化人類学的な「識字」(literacy) 研究に関わるものである。「文字の形態論/文字の意味論/文字の身体論(実践論)」という区分に即して言えば、本論の研究対象は「文字の身体論(実践論)」に属する⁽¹⁾。

本論は文字と身体の結ぶ関係の様態への論究を通して、文字と社会の結ぶ関係の様態を問う⁽²⁾。そのために文字をめぐる文化人類学の調査や宗教人類学の研究を参照し、再検討していく。社会を「身体の集合」(橋爪 [2000] 参照)と定義することがあるように、身体は社会を構成する基礎的な単位である。文字と社会の関係への問いは、文字と身体の関係への問いと複雑に絡み合っている。本論では文字嚙下の儀礼と伝承、そしてユダヤ教における文字観を検討する。ユダヤ教における文字観を検討するのは、そこに文字の帯びる審級性(これについては後述)が顕著に表れているからである。

文字と身体の結ぶ関係の様態については、重要な指摘がある。大澤 [1992] は文字の成立と専制的な性格をもった国家との緊密な連合に着目し、白川 [1976] の古代中国における文字研究などから示唆を得ながら、「集権身体」のような抽象性を備えた身体の存立と、文字の抽象的な記号関係との理論的な対応を指摘している。彼の議論は、「王の身体(集権身体)」のような身体の特定の状相が文字の存立を可能にするというように、文字存立の最小限の条件を探るという立場と捉えることができる。

大澤 [1992:391] によれば文字は「音声に從属した図像」、あるいは「記号(音声)に対す

る記号(図像)」と定義される。彼の指摘では、「抑圧身体」に準拠して組織される「原始共同体」においては、図形——とりわけ身体という場に直接描かれた図形——は、つねに複数の異なる意味を同時に表現する。そこでは図像表現と個々の意味の結びつきは、他の意味との結合も可能なので、偶有的なものとして現れざるをえない。「抑圧身体」よりも抽象性が高い「集権身体」と文字との関係について論じた箇所を、大澤 [1992:397-398] から引用する。

…超越的な身体が、集権身体の形式で抽象的な水準に設定され、内在的な身体(過程身体)から切り離された場合には、記号的な秩序に絶大な効果がもたらされる。第一に、いまや記号は一義的なもの(無矛盾なもの)として、現れる。つまり、記号(表現)と意味との結合は、社会に内在する者たちから捉えれば、必然的なものに見えてくる。なぜならば、集権身体は、身体の内在的な水準から隔絶されているので、記号的な結合——表現と意味の結合——を保証する超越的な機能を、十全に果たすことができるからだ。身体の内在的な水準と超越的な水準の間の、(自己準拠的な)循環関係が、断ち切られたのである。

第二に、記号は、まさに一義的であるというそのことによって、集権身体を、あるいはより厳密には集権身体の効果をつねに同時に意味してしまう。集権身体は、抽象的な水準に切り離されている。だから、視覚的な記号(図像)は、直接の意味だけではなく、抽象的(理念的)な平面で成立しているもう一組の記号に対する、記号になる。(大澤 [1992:397-398])

大澤 [1992] によると抽象的(理念的)な平

面で成立しているもう一組の記号とは、「声」である。そして文字は「王（集権身体）の声を写し取る図像表現」として位置づけられる。しかし「王（集権身体）の声」とは、どのような性格を備えた声なのか判然とせず曖昧さを残した表現となっている。また彼の議論では「王の身体（集権身体）」が、文字よりも先行的に自存しているかのような局面が主題化されているので、文字と身体が相互に作用し合い、文字の「同一性」や身体の「同一性」が構成されていく様態が十分には考察されていない。文字は「王の身体（集権身体）」に従属したり、「音声」に従属するだけではなく、文字が「王の身体（集権身体）」のような身体の様態を左右し、文字こそが「王の身体（集権身体）」の存立を支えているという事態をさらに踏み込んで検討する必要がある。

大澤 [1995] では、これとは別の文字理解の可能性を示唆している。同書では文字のような「メディア」に接することにより、身体の様態が変容する（「身体のメディア的変容」という事態に着眼していると思われる。いわば王の身体の声を書き取る図像表現として文字が存立だけではなく、文字が身体の様態を左右し、規定するという事態にも注意が払われている。また彼は、「文字の神秘的な魔力」（ないし「文字の神秘力」という現象に言及している。「文字が導入されたとき、しばしば、「書かれたもの」に神秘的な魔力が宿るとする信念が、広く人々に共有された」（大澤 [1995:99]）と指摘されている。「文字の神秘的な魔力」とは、超越的審級の様態と関係をもちつつも、それとはずれをはらむような微妙な位置に存立しているように思われる。「文字の神秘的な魔力」には、身体が文字を操作し、制御するという事態と、身体が文字により制御されるという事態の両方が、併存し

ているのである。

本論は、以上のような議論と重なる部分もあるが、次の点で異なる。大澤 [1992] の議論では、身体の社会性を比較社会的に考察することに、理論的な努力が払われているため、「文字の存立」という事態をもっぱら身体の抽象的な位格から辿っているのだが、本論では身体が文字を（文字として）了解し、制御する様態と、逆に身体が文字を介して了解され、文字により制御される様態、つまり身体と文字とが相互に規定し合う関係を主題化する。そもそも文字や身体という語は定義が難しい。大澤のように文字に「音声言語に対応する図像表現」という定義を与えることは可能であるし、身体に「人間に特有の精神現象を宿している生命体」（橋爪 [2000:40]）という定義を与えることは可能である。しかし以下の記述と分析では、このような定義を括弧に入れ、文字と身体が互いに他を規定し合う様態を問う。

さらに文字と身体の結ぶ相互規定的な関係は、それが生み出し、巻き込まれるところの社会（間身体的な協働連関）と関わらざるをえない。いいかえると文字を（文字として）同定し、了解するとき、文字に接する身体も同定を被り、了解されるのだが、それに相即して文字使用を組み込んだ社会自体も、同定を被り、了解されるのである。こうした文字了解、身体了解、社会了解という三者の間で結ばれる関数的な関係に対する分析視角を得ること、これが本論のねらいである。このような関数的な関係のなかで「同一性」が仮構され、擬制される文字が、「社会的対象としての文字」である。

上記の目的のために、本論では文字の嚙下行為に注目する。文字の嚙下行為（儀礼と伝承）は従来、「口承性」と「書字性」（あるいは「声の文化」と「文字の文化」）という枠組みに即し

て、口承性（の名残）として解釈されてきた（Goody [1968]、Messick [1983] など）。しかしこれは必ずしも妥当ではない⁽³⁾。文字嚙下の伝承と儀礼は、「口承性」と「書字性」ではなく文字と身体の関係の様態に定位した場合に、理解可能になる。先取りして言うと、文字の嚙下行為（儀礼と伝承）には文字の物質的な具現、文字の身体への内化、文字の物質としての消失、という三つの契機が存在する。文字の物質的な具現、文字の身体への内化、文字の物質としての消失という三つの契機を通して、文字了解、身体了解、社会了解の関係が編成（再編成）されていくが、こうした編成（再編成）の様態を捉えたいのである。

文字嚙下に即して文字了解、身体了解、社会了解との関係について述べておこう。食べられるものとして文字が了解される場合、それに相即して、文字を食べるものとして身体が了解される。さらに食べられるものとして文字が同定される場合、文字嚙下を伝承や儀礼として組み込んだ社会自体の同定が行われるのである。いいかえると文字の措定（再措定）が行われるのに相即して、身体の措定（再措定）と社会の措定（再措定）が行われるわけである。

身体と文字の結ぶ相互作用的な関係——身体が文字を（文字として）了解し、制御するという事態と、身体が文字により了解され、制御されるという事態——は相即的なものであるが、本論では両者を操作的に区別する。第二節で身体が文字を（文字として）了解し、制御するという事態を扱い、第三節では逆に身体が文字により了解され、制御されるという事態を扱う。第二節では、まず文字呪術としての文字嚙下の儀礼を考察し、そして文字嚙下を伝承の形で表現したものとして「文字喪失の伝承」を検討する。第二節では文字嚙下行為の三つの構成契機、

文字の物質的な具現、文字の身体への内化、文字の物質としての消失に着目することになる。むしろ文字の物質的な具現の可能性と、文字の物質としての消失の可能性とは結びついている。「文字喪失の伝承」の検討では、文字の身体への内化という肯定的な契機と文字の消失という否定的な契機を内在させながら、そして肯定的な契機と否定的な契機との間を揺れ動きながら「文字喪失の伝承」が存立していることを示したい。第三節ではユダヤ教的な文字観に内在する文字嚙下の記述などに着目し、とりわけ文字が審級性（これも文字の「同一性」の一形態である）を帯び、文字了解を介して信仰の共同体やそれを構成する身体が措定（再措定）されるという事態に分析の糸口を与える。そして結論としては、身体や文字、社会の「同一性」なるものが、間身体的な協働連関において、互いに他を措定し再措定するなかで、仮構されるものであることを示すことになる。

文字の書記行為による物質的な具現と嚙下行為による物質としての消失との連関を、身体論的に言い直せば、次のようになる。文字の物質的な具現は「手」の働きを主な担い手とし、文字の物質としての消失は「口」を通じて遂行される。こうした「手」の働きを通じた書記行為と「口」を通じた嚙下行為とは、外化と内化という対照的な方向性として捉えられる。この相反する方向性のもとで、身体の「同一性」や文字の「同一性」が構成されあるいは壊乱されるのである。こうした検討を通じて、文字に接する身体の様態が浮き彫りにされるし、文字論を介した身体論の探究も可能になるだろう。以下の節ではここまで述べた事柄を、より具体的な局面に即して見ていく。

先に述べたように、本論では文字了解、身体了解、社会了解の連関を、文化人類学的な（あ

るいは宗教人類学的な) 記述を検討しつつ論じるが、その際に論者の側の文字了解、身体了解、社会了解の様態も問題にならざるを得ない。論究対象となっている文字了解、身体了解、社会了解の連関と、論者の側の文字了解、身体了解、社会了解の連関との間の関係も、いわば関数的な関係にある(4)。本論で扱う文字嚙下の伝承や儀礼の様態やユダヤ教における文字観は、文字使用が普及し一般化した「われわれ」(不明瞭で多くの問題をはらむ言い方ではあるが、本節に限りこの言い方を用いる)の視座から捉えたものである。本論で分析対象になる文字観は、文字使用を馴染みのものにした「われわれ」の視座から捉えたものであるという理由で無意味になったり無価値になったりするのではなく、むしろ「われわれ」の視座から捉えたものであるからこそ——「われわれ」に深く根ざしたものであるからこそ——問いかつ論じる意義が生じるのである。

そもそも「われわれ」の文字了解を明示的に問う(対自化する)ことは難しいので、問うことをあきらめない限り、「われわれ」の視座から捉えた文字嚙下を儀礼や伝承として組み込んだ社会やユダヤ教などに見られる文字了解を媒介にして、それらに対する「われわれ」の文字了解の仕方を明示的には難しくても浮かび上がらせる必要があるのではないか。文字嚙下を伝承や儀礼として組み込んだ社会に見られる文字了解や、ユダヤ教の文字観に見られる文字了解を検討し、そこからいわば陰画のように「われわれ」の文字了解を少しずつ立ち現せることは可能ではないだろうか。

2. 文字の物質的な具現、文字の身体への内化、文字の消失という三つの契機——文字嚙下の伝承と儀礼

まず文字呪術における文字嚙下の儀礼を検討する。文字呪術に定義を与えておくと、身体を取り巻く現実を左右するような力を文字に認め、呪術を執り行う者や依頼者、周囲の人物の病気治療、富や力の獲得、安全や成功の祈願といった目的のために、文字(文字の帯びる力)を利用する行為である。文字呪術としての文字嚙下の儀礼とは、病気治療、富や力の獲得といった目的のために、実際に文字嚙下を行うというものである。

文字呪術において、呪術に関わる身体は文字を操作対象とし、制御しようとする。身体が文字を操作対象と捉え、呪術行為に組み込むという事態について、グディとドゥッテの見解を検討しよう。グディ [1968:230] は「書くことは言葉を物質的な対象(material object)に変えるので、言葉はより簡単に操作可能になる」と述べている。「書くこと」によって言葉が「より簡単に操作可能になる」とは限らないが、グディの言葉は、文字の物質的な具現と文字の操作対象化の関係を示唆している。ドゥッテ [1909] は「言葉を表す図像記号は、その物質的な形態ゆえに音よりもずっと扱いやすく、持続することができるので、魔術的な力がそこに宿るように思えるのは必然である。いいかえれば、書くこと自体が魔術的な力を帯びているように考えられるのである」と述べている。グディと同様、ドゥッテの引用箇所も疑問の余地があるが、大事なことは文字の物質的な具現を通して、身体が文字を操作対象とし、呪術行為に組み込むということである。

グディによれば、文字嚙下の実践(the practice of 'drinking the word')はイスラム教の影響を受けた西アフリカで現在も広範に行われており、ゴンジャ族やセネガルからハウサランドにかけ

ての地域を挙げている。ここでは西アフリカのマンデ社会における、文字呪術としての文字嚙下の実践についてブレッドソーとロビー [1993] を参照しよう。

moriman (イスラムにおける文字呪術の職能者) は神の助けを得るために、神の文字と広く考えられているアラビア文字を使いこなす。morimanは詩句を紙に書き、それをきつく巻き、紐で結び、護符を入れる小袋に入れる。あるいは特定の長さの板に焼いたlubaの木片で詩句を書き、詩句を水で洗い流し、nesi (「聖なる水」) という黒い液体を作ることもある。morimanは護符や液体を浄め、依頼者にその使い方を教える。依頼者は護符を身につけたり、土に埋めることもあるし、nesiを飲んだり、身体に擦り込むこともある。アラビア文字を革の小袋に縫い合わせたり、水の中に溶かすことは、秘密の雰囲気 (an air of secrecy) をこの出来事にもたらすのである。(Bledsoe and Robey [1993:118])

アラビア文字は書記行為を通じて物質的に具現し、その後水で洗い落とされた場合には、文字は物質としては消失することになる。その水はnesiと呼ばれ、飲み込まれたり、身体に擦り込まれたりする。文字は嚙下行為を通じて身体に取り込まれ、文字を、そして文字の帯びる力を身体の一部にしようとする内化の方向性が認められる。このような文字嚙下の儀礼は、身体を取り巻く現実を左右する力を文字に認めるとともに、文字を操作対象として制御しようとする行為であり、文字呪術の一環として考えられる。

文字嚙下行為において、文字は書記行為を通じて物質的に具現し、嚙下行為を通じて身体に

内化され、文字は物質としては消失することになる。書記行為による文字の物質的な具現 (可視化)、嚙下行為による文字の内化、文字の物質としての消失 (不可視化) という三つの事態を、文字嚙下の行為を構成する主要な因子として捉えられるのではないか、というのがここでの仮説である。文字の嚙下行為には、文字の帯びる力を身体に取り込もうとする積極的な契機と、文字の物質としての消失という否定的な契機とが併存し、いわば両者は表裏をなしている。「文字喪失の伝承」を通じて、このことを検討する。先のブレッドソーとロビーの引用は文字嚙下の儀礼であり、以下に検討するのは文字嚙下の儀礼を伝承の形で表現したものである。文字嚙下の儀礼に比べて、文字嚙下の儀礼を伝承の形で表現したものは、文字や身体、そして社会が共同主観化されたイメージとなり、それぞれが相対的な自律性を獲得していることを付言しておく。

これから見る「文字喪失の伝承」には、文字嚙下の帯びる肯定的な契機 (文字の身体への内化) と否定的な契機 (文字の物質としての消失) とが併存している。東南アジアの大陸山岳部から島嶼部にかけての少数民族、台湾のインドネシア語族系の少数民族、太平洋上のフィジー族、ニュージーランドなどでは、文字をなくした伝承、つまり神話上の原古には文字をもっていたが、後に失われてしまったという伝承がある (大林 [1965]、関本 [1975])。この種の「文字喪失の伝承」を大林と関本は種々の視角から記述し、分析している。本論ではこのような伝承に対して、文字の嚙下行為という観点から再検討する。北ビルマの山岳地帯に住むカチン族の伝承を、関本 [1975] はドイツの民族学者シャーマンの記述に即して紹介している。

かつて大神が文字の分配を行った時、ビルマ人とシャン人にはしゅろの葉に書かれた文字を、中国人とヨーロッパ人には紙に書かれた文字を、そしてカチン族には動物の革に書かれた文字を与えた。文字を刻んだ革を小脇に抱えて帰ったカチンは汗をかいてそれを濡らしてしまい、火にかけて乾かさねばならなかった、その時ねずみがこの革をくわえて米籠の中にひきずっていき噛み砕いてしまった。人々は文字の内容を護ろうとして、米を水につけてその水を飲み下した。これから今日でもなおカチンの司祭ドゥスマは、予言を行うにあたってまず知識をわがものとするため米の酒を飲み酔うのである。(関本 [1975: 213])

文字に象徴される知識や力はねずみに食べられてしまい、人々は容易にそれらに近づけなくなる。文字の消失と、文字に象徴される知識や力を身体に内化するという行為が、いわば隣り合わせのものとして表現されている。いいかえれば、文字の消失という否定的な契機と、文字の帯びる力を身体に取り入れようとする肯定的な契機が表裏をなす。

カチン族の「文字喪失の伝承」は、「食べられるもの」として了解される文字、文字を食べる身体という文字了解と身体了解の連関をも示唆している。関本によると、先の場面の後に金銀財宝の分配の場面が続く。その場面は「文字喪失の伝承」が「文字を喪失した社会」の「同一性」に関わるものであり、文字了解と社会了解の連関を見出すことができる。

のちにふたたび大神がすべての諸族を自らのもとに呼び集めた時、シャン人、ビルマ人、その他の異族のものは、かつて大神より受け

た書物のなかにこの招集の理由をたずね、それが金、銀、財宝の分配に関わるものものであることを知った。そこで彼らは大きな籠を携えて神のもとにおもむいた。もはや書物をもたないカチンは何も知らずただ小さな袋を肩から下げて神のもとに現れた。当然にもカチンは乏しい分け前にしかあずかれず、貧乏なままとなった。他方他のものたちは、分配された宝を土台に彼らの富を築いた。(関本 [1975:213-214])

文字を喪失したがゆえに、金銀財宝を十分にもらうことができず、他の民族よりも貧乏な境遇にあるというカチン族自身による社会了解を垣間見ることができる。この「文字喪失の伝承」のなかには、食べられるものとしての文字(文字了解)と文字を食べるものとしての身体(身体了解)との連関、失われた文字(文字了解)と「文字を喪失した社会」(社会了解)との連関が認められる。そして次のことにも注目したい。関本が注意を促しているように、カチン族の伝承では「文字は単に失われたのではない」し、「そこにこめられた呪力は米酒のなかに移し入れられ、これを飲む司祭に神より与えられた聖なる知識として伝えられる」。おそらくカチン族の文字喪失の伝承は、否定的なニュアンスと肯定的なニュアンスのどちらもが入り混じったものである。文字嚙下行為はそもそも、肯定的な契機(文字の帯びる力の身体への内化)と否定的な契機(文字の物質としての消失)という二重性をはらんでおり、「文字喪失の伝承」は文字嚙下のこの二重性を含み込み、肯定的な契機と否定的な契機のあいだで揺れ動くような在り方を示しているのである。関本の扱っている次の北ボルネオ・サラワク地方の住民の伝承は、肯定的な契機(文字の帯びる力の身体への内化)が

顕著に現れているだけでなく、文字の物質としての消失が否定的な契機としてではなく、肯定的に捉え直されているかのようである。それは文字が身体に内化されて、もはや文字の物質的な具現自体を必要としなくなった、と解釈できる伝承である。

人類にことばを与えた創造主は、文字の使用法を伝えようと、さまざまな民族の最年長のものたちを集めた。彼らはみな筆記される記号を受けとった。だがボルネオの代表者はそれを飲み込んだ。そこで文字は肉体と一つになり記憶に形を変えた。それゆえ子孫たちは、自分たちの歴史、法、契約等々を心に刻みこみ、他の民族の書物に刻みこまれたものと同様に定まった確かなものとした。だが同時にそれはより生き生きと活発で近づきやすいものであった。なぜならボルネオでは今や誰もが、書物を所持したり学んだりすることなしに、また読んだことを忘れてしまうおそれなしに部族の歴史に良く通じ、自分たちの神々や伝説、その人に及ぼす力、戒めなどを知るようになったからである。(Scherman und Scherman [1922:118-119]、関本 [1975:214-215] より再引用)

「文字は肉体と一つになり記憶に形を変えた」とあるように、この伝承では、文字の物質としての消失はもはや否定的な契機ではなく、肯定的に捉え直されている。文字が身体に内化されて、もう文字の物質的な具現自体を必要としなくなったというように、文字の消失が肯定的に措定(再措定)されているわけである。

本節ではまず文字嚙下の儀礼を検討した。文字の物質的な具現を通じて、文字は操作対象となり、呪術に組み込まれるのであった。文字嚙

下の行為を構成する三つの契機として、書記行為による文字の物質的な具現、嚙下行為による文字の内化、文字の物質としての消失を取り出した。文字嚙下の伝承は、文字嚙下の儀礼的实践に比べて、文字と身体、社会が共同主観化されたイメージになっており、それぞれが比較的自由に結びついている。関本の優れた論考に依拠しながら、文字嚙下を伝承の形で表現した「文字喪失の伝承」を検討したのである。文字の身体への内化という肯定的な契機と文字の物質としての消失という否定的な契機のあいだで、「文字喪失の伝承」が揺れ動くような在り方を示していることを論じた。同時にそれらの伝承は、食べられる文字(文字了解)と文字を食べる身体(身体了解)との連関を示し、また失われた文字(文字了解)と「文字を喪失した社会」(社会了解)との連関を示唆するものであった。文字嚙下の儀礼の上演(再演)や文字嚙下の伝承の朗読の繰り返しなどを通じて、このような文字了解、身体了解、社会了解の連関は措定(再措定)され、更新されていくわけである。

3. 文字の帯びる審級性と身体の了解 ——ユダヤ教的な文字観

本節では文字の帯びる審級性と身体了解、あるいは文字了解と信仰共同体の「同一性」との関係に対する視角を得るために、ユダヤ教的な文字観を取り上げる。本来は数多くの神学的・宗教学的な議論を参照せねばならないが、本論ではユダヤ教的な文字観にアプローチするための糸口を見つけることにしたい。とりわけ身体が文字により了解され、意味づけられるという事態——文字の帯びる審級性——に着目する。文字の帯びる審級性とは、文字の帯びる「同一性」——文字の物質的な具現や消失が繰り返さ

れるなかで、文字それ自体の性質として錯認される——の一形態なのである。

「書物の民」としてのイスラエルの民という位置づけは周知のものであるし、信仰の拠り所としてのトーラーの存在も、文字の審級性を暗示させるものである。この審級性のもとで、文字嚙下の記述や儀礼が、積極的な意義——身体への文字の内化により、身体の同一性を支える働きをすること——を示したい。そしてユダヤ神秘主義と言われるカバラでは、文字の物質的な具現が「隠れたる神」の超越性をすら代補するような働きをしていることを示唆する。これはデリダ [1967=1983:242] の言葉を借りて「根源を跡づける文字」、「消滅のしるしを追跡する文字」と言えるだろう。

前節で文字嚙下行為の三つの契機——文字の物質的な具現、文字の身体への内化、文字の物質としての消失を取り上げた。例えば今から検討するユダヤ教的な文字観のなかでは、文字の物質としての消失は、必ずしも否定的な意味合いを帯びず、むしろ文字の物質的な具現と消失を繰り返すなかで、文字の同一性が指定されるのである。文字の審級性を暗示させるゴーレムの伝承から、論をはじめたい。

ユダヤ教では、しばしば言葉と文字に無形物に形を与える力があるという観念が存在したが、ゴーレムの伝承はそれを示唆するものである。伝説が生まれた時期や場所など不明な点が多いが、16世紀にボヘミアの首都プラハで語られるようになり、18世紀中葉から19世紀のはじめにかけて伝説として形を整えられていたと言われている。伝承の中でゴーレムは、ユダヤ人社会をキリスト教徒の迫害などから護るという役割を主に担っていた⁽⁵⁾。

伝承の中でゴーレムは、次のようにして作られる。ラビが粘土と水を混ぜ合わせて人形を作

り、秘密の呪文を唱えるなど一定の作法に則りながら、ゴーレムの額（あるいは舌や胸）に神の名を示すヘブライ文字を書き込む。伝承の変異形によってはゴーレムに羊皮紙の小片を差し込んだり、貼ることもある。するとゴーレムは生命を持ち、動き出すと言われている。ヘブライ文字を消せば、元の粘土の塊に戻る。ゴーレム伝説には人工的に生命を作り出そうという欲望と、人が神の立場に近づこうとする意志が認められるだろう。他面でゴーレム創造の伝承は、言葉と文字に生命を左右するような力を認める見方を表している。もともとゴーレムという言葉はヘブライ語の普通名詞であり、「無形のもの、未定形のもの」を意味する（檜山 [1990]）。ヘブライ語の言葉や文字は、未定形のゴーレムに形を与える効力をもつと考えられることがあった。文字に生命を左右するほどの審級性を認める事態が、ゴーレムの伝承に垣間見られるのである。

このような形で文字の審級性が垣間見られるユダヤ教的な世界像においても、文字嚙下の記述が例えば旧約聖書に認められる。旧約聖書の『エゼキエル書』には、人の子が蜜のように甘い訓の書で腹を満たす場面がある。『民数記』にも「姦淫の疑惑を持たれた妻の判決法」として、女が掟のインクの飛沫を飲む場面がある⁽⁶⁾。文字や巻物に聖性を認める叙述は旧約聖書のなかに数多くあり、しばしば文字や巻物は嚙下行為を通して身体に取り込まれる。これについて、クリステヴァは次のような見解を示している。

文字を自分のものにするとは、ことばを、語の厳密な意味で肉体化すること（すなわち、神聖な「言葉」は肉体を授けるために、それを人体のなかに吸収し、それを血肉の中へ取り入れる

こと)に等しい。文字は聖書においては、呑み込まれ、食べられている。文字が掟となるためには、血肉の中に入り、人間の[社会的]身体によって同化されねばならないのだ。(Kristeva [1969=1983:152-153])

ユダヤ教的な世界像のなかで、聖性を帯び、高い威信を備えたヘブライ文字を、食べられる対象として了解する仕方が存在したと考えられる。ただし、文字があらかじめ聖別化されていたのではなく、文字は嚙下行為を通じてこそ、その審級性が担保されるのである(7)。文字嚙下の儀礼について言えば、中世のユダヤ人社会の一部で、子どもが読み書きを学ぶ前に、石板に蜜で書いた文字をなめるといふ儀礼——「蜜の文字」——が行われていたという報告がある(Manguel [1996=1999:87])。書記行為を通じて文字は物質的に具現し、嚙下行為を通じて身体に内化されるのである。手の働きを通じた書記行為による文字の物質的な具現と、口を通じた嚙下行為による身体への内化は、外化と内化の対照的な方向性として捉えられるだろう。

文字の審級性に関して、ユダヤ神秘主義と言われるカバラに言及しておきたい(8)。カバラでは神は「隠れたる神」としてしばしば特徴づけられ、またYHWH(テトラグラム)のような神の名は「発音不可能」とされていた。デリダは「神はもはやわれわれに語らない。途中で口をつぐんでしまった。独断で言葉の意味を取らねばならない。」(Derrida [1967=1977:131])と述べているが、デリダのこの言葉は、「隠れたる神」という神の存在性格に言及していると解釈できる。ジャベスは、さらに示唆的なことに「書くこと、それは起源への情熱を抱くこと」という見解を示している。(Jabès [1965=1995:26])。

文字の物質的な具現は、ある意味で姿を現さ

ない神を代補するものであり(9)、カバラにおける信仰の共同体を支える審級の役割を果たしていると捉えることができるかもしれない。文字(ヘブライ文字の置き換えや組み合わせのような文字操作)を通じて神による創造の秘密に近づこうという思想を、カバラの「結合術の学」に見出すことができるが、これもカバラにおける文字の占める審級的な位置を傍証するものである(10)。ユダヤ教的な文字観において、文字が「隠れたる神」の超越性を代補するような審級性を帯びており、信仰の共同体やそれを構成する身体が、文字を介して了解される様態を、本節で仮説的に示したのである。

4. 結論と今後の課題

文字を社会的対象として捉え、文字嚙下の様態(儀礼と伝承)の検討を通じて、文字了解、身体了解、社会了解の三者間の関数的な関係に近づくことが、本論の課題であった。食べられるものとして了解される文字、文字を食べるものとして了解する身体、文字嚙下の伝承や儀礼を組み込んだ社会(間身体的な協働連関)、この三者の関係に着目したわけである。とりわけ文字と身体の間相互作用的な関係について言えば、第二節では文字嚙下の儀礼と伝承のなかで、特に身体が文字を了解し、制御する様態を、第三節ではユダヤ教に内在する文字嚙下の記述などを通して、身体が文字により了解され、制御される様態を照射した。むしろ身体が文字を了解し、制御する事態と、身体が文字により了解され、制御される事態は相即するものだが、両者の操作的な区別により第二節では前者を、第三節では後者に重点をおいた。

第二節で見たように文字の物質的な具現、文字の身体への内化、文字の物質としての消失は、

文字嚙下行為を構成する三つの契機であった。文字の物質的な具現の可能性は、文字の物質としての消失の可能性と結びついているし、文字の身体への内化と文字の物質としての消失とは、表裏をなす事態である。「文字喪失の伝承」はこれらの契機を組み込んだものであり、文字（文字の帯びる力）の身体への内化という肯定的な契機と、文字の消失という否定的な契機の間を揺れ動くような在り方をするのである。

そして文字の物質的な具現と文字の身体への内化との関係を、身体論的に言い換えると、手の働きを通じた書記行為による文字の物質的な具現であり、口を通じた文字の嚙下行為による文字の身体への内化である。この相反する方向性により、身体の「同一性」や文字の「同一性」は形成されたり、揺り動かされたりする。

文字嚙下の儀礼のような場面で書記行為と嚙下行為が繰り返されることにより、文字と身体の関係の様態は再生産されたり、更新されたりするのである。さらに踏み込めば、文字の「同一性」や身体の「同一性」、社会の「同一性」といったものに対して、次のような検討を加えることができる。それは第一節で文字や身体 of 定義を括弧に入れたことと関係する。文字の「同一性」や身体の「同一性」、社会の「同一性」なるものも、このような書記行為や嚙下行為、さらには読解行為といった諸行為を通じて繰り返される措定・再措定の運動の所産である。例えば第二節で検討したように、文字嚙下の儀礼の上演（再演）や文字嚙下の伝承の朗誦の繰り返し——いわば「差異をはらむ反復」——などを通じて、文字了解、身体了解、社会了解の連関の措定・再措定が繰り返される。このような措定・再措定の繰り返しを通じて文字や身体、社会の「同一性」が仮構され、擬制されるのである。

文字の書記行為、読解行為、嚙下行為の三者の関係性については、「食べられる言葉」(Marin [1986=1999]) をめぐる神学的・記号論的な問題系に接続できるだろう。その際には、文字と身体の関係の様態だけではなく、声と文字の分節の様態を絡めた議論が必要になるが、これを今後の課題とする。

註

(1) 文字と身体の関係をめぐる問いとして、「識字」(literacy) 研究に言及しておく。「識字」(literacy) 研究の分野では多くの研究蓄積があるものの、文字と身体、あるいは文字と社会の関係の様態を捉える理論枠組みが十分に整備されているとは言えない。「識字」に関する比較的著名な研究としては、グディヤワットによる、文字の使用が「認識構造」に与える影響（状況依存的でない思考ができるようになる、あるいは三段論法のような形式的な推論ができるようになる等）の調査、コールとスクリプナーによるアフリカ西部のリベリアに住むヴァイ族の「識字」状況の調査などがある。「識字」研究では近年、「識字の社会学」'the sociology of literacy' という立場を提起する論者もいる。「識字の社会学」とはブレッドソーとロビーによると「書くことをコミュニケーションの様態として、また社会関係の潜在的な源泉として分析する」のであり、彼らは西アフリカのマンデ社会の調査を通じて、「秘密、儀礼、社会階層」といった社会的文脈とアラビア文字や英語の使用様態（文字呪術の実践や呪術の教授の仕方等）との関係を記述・分析している。彼らの立場は、「識字」について文化人類学的な調査を行いつつ、社会学的な（社会関係における「秘密」の機能に着目するなどして）理論構築を試みるものだろう。

(2) 文字と社会の関係の様態の考察にあたっては、

「無文字社会」という表象の歴史的・社会的展開を辿るという方法もある。民族学や文化人類学の分野では、文字の有無が社会の特性を弁別する指標になってきたからである（石田 [1959] 参照）。とはいえ近年、「無文字社会」という概念には反省が加えられ、検討が積み重ねられている。川田順造は「無文字社会」を研究する意義について、次のように述べている。それは文字と社会（社会の様態）との緊密な結びつきを示唆するとともに、文字と社会の関係を問うことの必要性を示す箇所でもある。

…筆者の立場は、旧来の東洋史・西洋史の枠の中でつくられてきた概念や方法を、文字社会の「辺境」としての無文字社会に拡大してあてはめようとしたり、あるいは文献史学の単なる補助資料として無文字社会の伝承をひろいあげるといふことにはなく、むしろ、少しずつでも、無文字社会の歴史の性格をあきらかにすることによって、逆に、文字を用いる社会を、人類史の中での特殊な発展形態として、位置づける視点を築いてみようとするところにある。それはひいては、「近代」というものを、深い根の部分から掘りおこす、梃子のひとつのささえともなりうるだろう。（川田 [1976→1990:4]）

川田は西アフリカのモシ族を中心に、「無文字社会」の口頭伝承を研究することにより、「無文字社会」の歴史的性格を検討するとともに、さらには「文字社会」の歴史的性格の逆照射を試みている。川田の言う「無文字社会」とは実体ではなく、「口頭伝承」と「文字記録」との差異、そして文字と社会との関係（さらには文字と文明との関係）を問うための仮説構成体としての機能を備えている。本論は文字と社会との関係を問うという意味で、川田の指摘に関わる試みである。ただし文字性と

無文字性の関係、口頭伝承と文字記録の関係の様態に着目する川田とは視角が異なり、本論では文字と身体との結ぶ関係の様態から、文字と社会の関係を追究する。

- (3) 「口承性」と「書字性」（あるいは「声の文化」と「文字の文化」）との差異を対比させて論じる際に、次のような困難が顕著に現れる。それは文字に依拠して、文字について論じるという自己言及的な構造に関わる困難であり、あるいは文字使用が普及し一般化した社会に内在した立場から、文字について論じるという自己言及的な構造に関わる困難である。菅野（[1999]）等を参照。
- (4) ここに「一次モデル」と「二次モデル」をめぐり理解社会学的な問題が現れるが、これについては今後の課題とする。（佐藤 [1993:10-21] 参照）
- (5) プラハのゴーレム伝説については、檜山 [1990]、Scholem [1960=1985] を参照。
- (6) 新共同訳では次のようになっている。「人の子よ、目の前にあるものを食べなさい。この巻物を食べ、行ってイスラエルの家に語りなさい。」私が口を開くと、主はこの巻物を私に食べさせて、言われた。「人の子よ、私が与えるこの巻物を胃袋に入れ、腹を満たせ。」私がそれを食べると、それは蜜のように口に甘かった。（『エゼキエル書』3.1-3）祭司はこの呪いの言葉を巻物に書き、それを苦い水の中に洗い落とす。その呪いを下す苦い水を女に飲ませ、呪いを下す水が彼女の体内に入れば、それは苦くなるであろう。（『民数記』5.23-24）
- (7) 書記行為と読解行為に関わる、文字が審級性を帯びる事態に言及しておく。旧約聖書中の『ダニエル書』には、「壁に字を書く指の幻」という場面があり、そこでは文字が特異な現れ方をする。王宮の白い壁に指が現れて文字を書き、祈祷師、賢者、占星術師らが集められるが、誰もそれを読み解くことができない。「神々のような知恵」を備えたダニエルのみが、文字を読み解き、傲慢な王

の死を予言するに至る。ここに謎めいた文字や文字列を書く「手の運動」を見ることができるだろう。

そもそも文字を書くという行為自体が、事後的に意味づけを要求するような文字列を生み出す営みなのである。書記行為を通じた文字の物質的な具現が先行し、書き記された文字が読解行為を要求すること——これも文字の審級性を構成する重要な契機である。デリダの示唆的な指摘を引いておこう。「純粋なく読むこと」の空間はいつもすでに知解可能 (intelligible) であり、純粋なく書くこと」の空間はいつもまだ感覚可能 (sensible) なのだ。」(Derrida [1967=1972:281]) 先の『ダニエル書』の場面は、事後的な意味づけを要求する文字列を生み出す「手の動き」が、顕著に現れているのである。註(10)でも言及するが、このような手の動性は、文字の「同一性」や身体の「同一性」を支えるだけではなく、攪乱するような働きをするだろう。

(8) 厳密には多くの神学的な議論を参照し、再検討しなければならないが、本稿ではその余裕がない。文字と神の身体との関係については、ショーレムの議論を参照のこと (Scholem [1960=1985])。

(9) 文字嚙下ではないが、カバラにおいても、身体

が文字により了解され、制御されるという考え方が存在した。例えば『正義の書』には文字が身体の様態を直に左右するさまが記されている。「彼の思考と創造力のなかに透入した文字こそが、その動きで彼を左右し、種々な主題についての彼の思考を集中させるのだ。」(Kristeva [1969=1983] より引用) 文字の審級性に相関するが、カバラの世界像において文字が世界を構成する単位のような位格を占めていたことについては、エプスタインの議論を参照のこと (Epstein [1978=1995])。

(10) レヴィナスはタルムードを解釈する講話のなかで、「手の意味論」について考察を展開している (Lévinas [1988=1993])。彼によると手を意味するヘブライ語「アスカニオート」は、いつも忙しく動き回るものの意で、どんなものでも掴もうとする手を示している。彼によると手以上に動きに富むもの、手以上に不作法で落ち着きのないものは他にない。レヴィナスの指摘は、ユダヤ的な世界像における「手の多忙さと性急さ」「手の直行性」を示唆するものだろう。このような手の制御困難な動性による書記行為も、身体の「同一性」や文字の「同一性」が措定されたり、壊乱されたりする契機と考えられる。

文献

Besnier, Niko 1995 *Literacy, Emotion, and Authority: Reading and Writing on a Polynesian Atoll*, Cambridge University Press.

Bledsoe, Caroline H. and Robey, Kenneth M. 1993 "Arabic literacy and secrecy among the Mende of Sierra Leone", in Street, Brian. (ed.), *Cross-Cultural Approaches Literacy*, Cambridge University Press.

Bloch, Maurice 1968 "Astology and Writing in Madagascar" in Goody, Jack (ed.), *Literacy in Traditional Societies*, Cambridge University Press.

Chartier, Roger 1992 *L'Ordre des livres : Lecteurs, auteurs, bibliothèques en Europe entre XIV et XVIII siècle*, École des Hautes Études en Sciences Culturelles.=1996 長谷川輝夫訳『書物の秩序』ちくま学芸文庫。

Derrida, Jacques 1967 *De la grammatologie*, Les éditions de Minuit.=1972 足立和浩訳『根源の彼方に—グラマトロジ

- ーについて』現代思潮社。
- 1967 *L'écriture et la différence*, Éditions du Seuil, Paris.=1977若桑毅、野村英夫、阪上脩、川久保輝興訳『エクリチュールと差異 (上)』法政大学出版局。1983梶谷温子、野村英夫、三好郁朗、若桑毅、阪上脩訳『エクリチュールと差異 (下)』法政大学出版局。
- Doutté, Edmond 1909 *Magie et Religion dans l'Afrique du Nord*, Algiers.
- 遠藤知巳 2000 「言説」の経験論的起源」(上)、(下) 『思想』No.912, 913。
- Epstein, Perle 1978 *Kabbalah—The Way of the Jewish Mystic* =1995 松田和也訳『カバラーの世界』青土社。
- Goody, Jack (ed.) 1968 *Literacy in Traditional Societies*, Cambridge University Press.
- Goody, Jack 1977 *The Domestication of the Savage Mind*, Cambridge University Press.=1986吉田禎吾訳『未開と文明』岩波現代選書。
- Goody, Jack and Watt, Ian 1968 'The Consequences of Literacy', in Goody, Jack (ed.), *Literacy in Traditional Societies*, Cambridge University Press.
- 檜山哲彦 1990 「模造のことは、ことばの欲望 プラハ ゴーレム 物語」、市川浩、加藤尚武、坂部恵、坂本賢三、村上陽一郎編『現代哲学の冒険11 技術と遊び』岩波書店。
- 橋爪大三郎 2000 『言語派社会学の原理』洋泉社。
- Hudson, Nicholas 1994 *Writing and European thought 1600-1830*, Cambridge University Press.
- 川田順造 1976→1990 『無文字社会の歴史—西アフリカ・モシ族の事例を中心に』岩波書店、同時代ライブラリー。
- 石田英一郎 1959 『文化人類学序説』時潮社。
- Jabès, Edmond 1965 *Le Retour au Livre*, Gallimard.=1995鈴木創士訳『書物への回帰』水声社。
- Kristeva, Julia 1969 *Le langage, cet inconnu*, S.G.P.P., Paris.=1983谷口勇、枝川昌雄訳『ことば、この未知なるもの』国文社。
- 共同訳聖書実行委員会 1987、1988 『聖書 新共同訳—旧約聖書統編つき』日本聖書協会。
- Leroi-Gourhan, André 1964 *Le geste et la parole*, tome I, Albin Michel.= 1973荒木亨訳『身ぶりと言葉』新潮社。
- Lévinas, Emmanuel 1982 *L'Au-delà du Verset*, Éditions de Minuit.=1996合田正人訳『聖句の彼方』法政大学出版局。
- 1988 *A l'heure des Nations*, Éditions de Minuit.=1993 合田正人訳『諸国民の時に』法政大学出版局。
- Lévy-Bruhl, Lucian 1922 *La Mentalité Primitive*, Paris, Librairie Felix Alcan.
- Manguel, Alberto 1996 *A History of Reading*, Westwood Creative Artists, Toronto.=1999原田範行訳『読書の歴史—あるいは読者の歴史』柏書房。
- Marin, Louis 1986 *La Parole Mangée et autres essais théologico-politiques*, Mériens Klincksieck, Paris. =1999梶野吉郎訳『食べられる言葉』法政大学出版局。
- Meggitt, Mervyn 1968 'Uses of Literacy in New Guinea and Melanesia', in Goody, Jack (ed.), *Literacy in Traditional Societies*, Cambridge University Press.
- Messick, Brinkley 1983 'Legal documents and the concept of 'restricted literacy' in a traditional society' in *International Journal of the Sociology of Language*, vol 42, pp.41-52.
- Ong, Walter Jackson 1982 *Orality and Literacy : The Technologizing of the Word*, Methuen and Co. Ltd.=1991桜井直文、

- 大林太良 1965 「東南アジアにおける失われた文字の伝承」、日本人類学会・日本民族学会連合大会第20会紀事。
- 大澤真幸 1990 『身体の比較社会学Ⅰ』勁草書房。
- 1992 『身体の比較社会学Ⅱ』勁草書房。
- 1995 『電子メディア論—身体のメディア的変容』新曜社。
- 坂井信三 1997 「研究ノート イスラーム世界の文字と呪術」、『民族学研究』1997.12。
- 佐藤俊樹 1993 『近代・組織・資本主義—日本と西欧における近代の地平—』ミネルヴァ書房。
- Scherman, Lucian und Scherman, Christine 1922 *Im Stromgebiet des Irrawaddy*, München.
- Scholem, Gershom 1957 *Die Jüdische Mystik in ihren Hauptströmungen*, Rhein-Verlag u. Alfred Metzner Verl. Frankfurt am Main. =1985高尾利数訳『ユダヤ神秘主義』法政大学出版局。
- 1960 *Zur Kabbala und ihrer Symbolik*, Rhein-Verlag, Zürich=1985 小岸昭、岡部仁訳『カバラとその象徴的表現』法政大学出版局。
- 1973 *Judaica 3*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main.=1975 高尾利数訳『ユダヤ教神秘主義』河出書房新社。
- Scribner, Sylvia and Cole, Michael 1981 *The Psychology of Literacy*, Harvard University Press.
- 関本照夫 1975 「文字をなくした伝承と未開の文字」、上田正昭編『日本古代文化の探求 文字』社会思想社。
- 白川静 1976 『漢字の世界—中国文化の原点』1、2、平凡社、東洋文庫。
- 1987=1994 『文字逍遥』平凡社ライブラリー。
- 1990=1996 『文字遊心』平凡社ライブラリー。
- Street, Brian (ed.) 1993 *Cross-Cultural Approaches to Literacy*, Cambridge University Press.
- 菅野盾樹 1999 『恣意性の神話—記号論を新たに構想する』勁草書房。

(うかい だいすけ)